

## シンポジウム・スポーツ学再考

新井 博<sup>1)</sup>

### Reconsidering on Sport Study

Hiroshi ARAI

Key words：スポーツ，スポーツ学，体育学，体育科学

#### はじめに

今回のシンポジウムのテーマは「スポーツ学再考」である。また主旨は、間もなく本学が開学10年を迎えるにあたり、これまで提唱してきたスポーツ学について再度考える機会を持ち、今後のスポーツ学構築を本学として如何にしていくのか、話し合っていくことである。

昨今、ソシユール生誕100年祭、ゲーテ生誕100年記念、マルクス生誕150年、日本スキー発祥100年など、100年や150年などの節目を祝う祭典・式典が、各界で行われている。意味は、単に偉人や功績を祝うだけでなく、改めてその時点で現代人が、どう考えているかなど、研究成果を明らかにする機会ともなっている。記念論文集などが、まさにそれである。

ここでの私の役割は、スポーツ学を皆さんで再考することをアシストするための「スポーツ学とは何か」について、分かりやすく紹介することである。だが、その役割はそんなに容易なことではなく、課せられた重圧は重い。ここでは、藤井英嘉先生が書かれたスポーツ学についての論考がすでに本学の紀要にあるので、できれば同じ方向からでなく、結果はともかく私なりに説明できればと考えている。

そこで考えたことは、スポーツ学の説明に辿り着くための方法として、歴史的にスポーツ学の概念を紹介することである。先ず、剣術・武術からスポーツへの概略を歴史的に理解し、続いて学術としての概略を世界的に理解し、スポーツ学の構築の可能性を探ることにしたい。

#### I. 日本における剣術・武術，体操，体育，スポーツへの概略

##### 1. 戦前の剣術・武術から体操へ

###### (1) 剣術・武術

源平の時代から貴族たちは自分の私財を守ることや反乱を鎮めるために、武士を置いたことから武士の時代が始まる。戦闘を専門とした彼らが、戦い（殺し合い）の仕方を上達させようとしたことから、剣術・武術が生まれていった。以後、武士は一つの階級になるまでとなり、刀を使う剣術と使わない武術に分かれ、それを元に各種の流派が各地に生まれていった。江戸時代にはその数1000とも2000とも言われ、村の数がその数とまで言われる程多くなったのである。

###### (2) 体操

明治時代になると西欧から近代化と民主主義が流入し、殺しあいの流派は不要とされ、剣術や武術は、剣道や柔道に代わって行っ

1) 生涯スポーツ学科

た。また、明治政府は、明治5年に近代教育の出発点と言われるの「学制」を公布し、教科に国語、算術らと並び体操を位置づけ、全国の学校で実施したのである。「学制」公布以後、明治23年に小学校令、中学校令、高等女学校令、師範学校令が公布され、体操の中身として普通体操、兵式体操、遊戯、水泳が行われた。

1913（大正2）年に「学校体操教授要目」が公布されると、加えて「スウェーデン体操」が位置づけられた。スポーツは、既に明治の初めから紹介（明治18年『戸外遊技法』）されていたが、教材としてはあくまで遊戯的な扱いであった。そのため、野球やテニスといったスポーツは上級学校に通う一部の裕福な学生達により、課外で実施されていたのである。

### (3) スポーツの兆し

大正末期の1914（大正15）年に、改正「学校体操教授要目」が公布され、体操の中身に変化が現れた。「競技」の名前でスポーツが、教材に加わったことである。「競技」の内容は、走技、跳技、投技、球技であり、僅かながらもバスケット、バレーなどのスポーツが教材として教科に導入された。昭和初期にも1934（昭和9）年「第2次改正学校体操教授要目」が公布され、さらにスポーツと柔道、剣道が促進されるようになった。しかし、1937（昭和12）年日華事変勃発から国防色が日に日に強くなり、戦時中になると1941（昭和16）年に「国民学校令」がだされ、戦場を想定した臨戦的な体操とスポーツに変えられていった。

明治時代から終戦までの時期における体操の特徴は、普通体操から兵式体操、スウェーデン体操からデンマーク体操が次々外国から導入されたことである。また、この期のスポーツの特徴は、大正末から市民によって実施されるようになり、昭和初期に全国的に組織化され、国民的に実施されるようになったこ

とである。

## 2. 戦後の体育からスポーツへ

### (1) 体育

敗戦によって日本は、連合国最高司令部（GHQ）の統治政策によって、戦中の軍国主義体育から民主体育に刷新された。1945年からの約10年の体育は、民主体育と呼ばれ戦前の軍国主義を基にした体操の反省に基づいて柔剣道・敵国思想が廃止され、精神主義的な体操に代わって体育（Physical education）が位置づけられることになった。特に、スポーツを教材とした体育が、始められるようになった。アメリカの体育家ウッドやキャシディー等によってまとめられた新体育論に従って、1949（昭和24）年学習指導要領が公布されると、小学校体育編、同年学習指導要領中学校・高等学校保健体育科体育編が出された。1958（昭和33）年の小学校学習指導要領総則、同年の中学校学習指導要領、1960（昭和35）年高等学校学習指導要領、1968（昭和43）年の小学校学習指導要領、1969（昭和44）年の中学校学習指導要領、同年の高等学校教育課程の改善について次々公布され、体育の中身はスポーツ教材が中心であった。

### (2) スポーツ

1960年代は、学校だけでなく国民的にスポーツが盛んになり、「みんなのスポーツ」の時代となった。子どもから老人までが、ボウリング、スキー、ゲートボールなどを行うようになり、スポーツは一部の得意な者たちだけの独占物ではなく国民のものとなった。背景には、当時ノルウェーの「トリム運動」、ドイツの「第二の道」（ゴールデンプラン）など、従来の勝敗にこだわったスポーツから、勝敗に重きを置かずにスポーツを楽しむ運動（sport for all）が、世界的に高揚していた時代背景があった。また一方で、戦後の疲弊した経済・産業界の立ち直りが進み、GDPの向上にみられるように生活水準の向上などが、

国民のスポーツ参加を後押ししていたのである。さらに、1964年の東京オリンピックの成功など戦後スポーツが発展し、バレーボール、体操、レスリングなど世界的な水準に到達したことから、競技スポーツにおいても一層盛んとなった。

1974年にはオリンピック参加資格規定からアマチュアの文字が外され、スポーツのプロ化が進むことになる。そこから、企業は重要なマーケティング戦略をスポーツにゆだね有名な競技会やトップアスリートに資金を提供するようになった。まさに、「スポーツの経済化」が始まる。また、時代は高度成長による産業経済から安定成長による文化経済に移行し、文化・学習・健康・福祉などが新しい産業として注目され、スポーツのプロ化とスポーツ振興の産業化が進む。

1980年代は、「生涯スポーツ」の時代と言われるようになった。高度化した便利な社会となり、それによってもたらされた運動不足、知育偏重、栄養過多、精神不安などにより、多くの人々の心や身体にうつ病や生活習慣病に代表される歪みをもたらされた。それに対して余暇時間の増大、健康ブームのなかで、政府は対策として生涯にわたりスポーツに取り組む運動を始めたのである。背景には、教育学者ベルクソンによるユネスコでの生涯教育の提唱などもあった。

戦後、体育でスタートし、今日でも体育の名称は使われているが、1990年以降名称ともども社会的にスポーツがその主流を占めるようになったと言える。

1990年代後半のバブル経済の崩壊によって、企業の広告塔であった企業内スポーツは衰退に向かい、やがてスポーツは企業から地域に根を張り出すようになっていった。地域をフランチャイズとしたサッカー、野球、バスケットなどの新たなスポーツの構造が立ち上がってきた。また、政府も2000年から「スポーツ21」など地域に重点を置いたスポーツ政策を打ち出したのである。なかでは、総合

型スポーツクラブを目玉にして、ヨーロッパ型の全国の中学校区で展開する壮大な国民スポーツ振興計画である。

2000年代に入ると、スポーツは国際化の時代に入った。地球の裏側で起こっているスポーツに関することやイベントがリアルタイムで伝えられ、またスポーツ選手・コーチ・トレーナーなどが、決まった国だけでなく世界の国々を相手に、自由に仕事をするようになってきている。

戦後の日本のスポーツは、初めスポーツ教材を中心とした学校体育がスタートし、次に1960年以降市民スポーツの時代が訪れ、さらに1980年以降スポーツの高度化と大衆化がおこり、プロスポーツ発展によるトップスポーツの発展と国民を巻き込む生涯スポーツの時代となっている。

## Ⅱ. 体育学のながれ

明治時代から今日までの間に、体操から体育、そしてスポーツへと変わる歴史につて、学術（＝専門的な学問）的な側面から眺めてみよう。学とは、ある内容について、学術的に体系だったものといった意味であり、体操、体育、スポーツと言われた各時代に、それらは学たりえたのか。歴史的に辿ってみよう。

### 1. 体操について

明治5年の「学制」公布以降、近代体育確立のために導入された体操は、終戦まで主たる内容であった。だが、果たして体操学たり得たのだろうか。それは、否である。専門的な学問としての体操学は、この間に誕生しなかった。当時は、アメリカから導入されたダイオリス考案の軽体操を学校で体操教師がそのまま機械的に教えることに終始し、専門的に研究するまでに至らなかったのである。

明治11年、明治政府は新たに設置した東京の体操伝習所に各県から体操教師を集め、アメリカ人リーラントから軽体操を学ばせ、日

本中に普及したのである。続いて明治20年代になると全国の学校で附属将校によって、兵式体操が教授された。明治30年代には体操遊戯取調委員会（明治33年）が設置され、全国の遊戯に関する調査が行われたが、科学的な研究までに至らなかった。さらに、明治末から大正末にかけて、文部省付体操教官の永井道明や桜井恒次郎がスウェーデン体操を全国的に普及し、三橋喜久雄らはデンマーク体操を全国的に普及している。

明治時代初期から戦前までの間に、体操の言葉と共に体操の内容（軽体操—兵式体操—スウェーデン体操、デンマーク体操）が使われていたが、体操を対象にして研究を進める体操学といった言葉は使われなかった。

## 2. 体育学について

### (1) 大正・戦前昭和初期

戦前は公の言葉として体操が使われたが、体育といった言葉は既に明治の初めに近藤鎮三によって使われ、一部で使われていた（雑誌『体育』など）。戦前の体育は、体育学たりえたのであろうか。体操と同様に、否である。

しかし、体育学の兆候は、みせていた。嘉納治五郎が明治44年にIOC委員に任命されると、日本は大正元年に第5回オリンピック・アントワープ大会に二人の日本選手を陸上競技に初めて参加させた。これ以後、初めてレース後の尿に関する蛋白・血色の検査が行われた。また、大正12年に国立体育研究所が開設し、解剖、生理、衛生、心理、教育、体操、遊戯、教育などの研究者が配置された。ここでは医学的側面と教育的側面、運動の側面からなっていた。以後、研究は昭和12年頃まで進んだ。形態の研究（体格、体力）、生化学的研究（尿の研究）、生理学的研究（ガス代謝、血液成分など）、心理的研究（運動の精神作用に及ぼす影響）、運動技術学的研究（キネシオロジー的研究、スポーツの指導書が出る）、教育学的研究（体育原論、体育史）

戦時下では、体育学的研究は衰退した。日

中戦争の勃発と同時に昭和13年厚生省が新設され、戦時色の強い体育学となった。さらに、昭和15年には国民体力審議会となり、国民体力法が公布され、体力章検定が国民的に実施された。国際的に比較され、日本人の体力・体格の悪さが浮き彫りとなった。その結果は、一層精神主義を強める材料となっていた。

戦前に体育学が始まるが、その根となる学問は医学であり、教育学であり、それに体育であった。体育が中心の学ではなかったのである。

### (2) 戦後の体育学研究

戦後になると、アメリカの占領下で戦前の帝国主義的体育の廃止と一方で民主体育の実施が行われた。連合軍最高司令部（GHQ）による1945年からの約10年の体育は、民主体育と呼ばれ戦前の軍国主義を基にした体操の反省に基づく柔剣道・精神主義体育の廃止などの内容であった。以後、日本に合ったスポーツを教材とした体育が、始められるようになった。昭和24年以降6・3・3・4制教育制度のスタートにより、新たに大学体育が実施されるようになった。大学体育の実施により大勢の体育研究者が誕生することになった。それによって、昭和25年日本体育学会や日本体力医学会が設置され、体育についての多くの研究が始まる。日本体育学会は、当初は周辺領域の研究者による助けがあったが、次第に専門研究者となり、原理、歴史、社会学、心理学、管理学、生理学、キネシオロジー、測定・評価、体育方法学、発育発達の分科会を持つようになって行った。

体育は研究が始められ、1960年以降中心に体育が座った学問として体育学の体系をなすことになったのである。

## Ⅲ. 体操・体育・スポーツについての術語学的研究

日本以外の国々では、体操・体育・スポー

ツといった言葉や概念は、どの様になっているのか歴史的にみてみよう。近代になってドイツ・オーストリアといったヨーロッパの国々で体操や体育が発達したことから、やはりそれらの国で体操や体育に関する術語学(Terminologie)的研究もいち早く始まった。

## 1. 戦前の術語学的研究

### (1) 世界的な術語学的な潮流

中世から家元的な諸流派によって分断され孤立していった体育を表わす術語が、18世紀以降ヨーロッパで多少統一されてきた。長い間、使われてきた「師匠」(maister, master)にかわり、「教師」(Lehrer, Teacher)が登場すると、体育の基本概念が確立され始めた。

特にドイツで1820年頃、ヤーン(Jahn, F.)によって体育の術語研究が開始されている。その後、1840年以降体操家シュピースによって体育の専門用語が整理され、以後言語学者でもあったヴァスマンスドルフやリオンによって検討が加えられていった。ヤーンの・シュピース的な伝統は、体育術語の研究として体系化されていくことになる。

第一次世界大戦以降、特にオーストリアではシュトライヒャーやガウルフォーファーにより自然体育が研究され、同時にユッナーやメール等により、用語に関する基本概念の整理が行われた。特に、メールは「術語学」(Terminologie)の必要性を強く訴え、後継者を養成していった。

戦後、オーストリアではメールの功績を受け継ぎ、ウィーンのH・グロルやグラーツのJ・レックラー、フェッツ、またドイツではH・ベルネットら、さらにチェコではフィアラらが登場してきたのである。

1950年代は、この世界でオーストリアが世界をリードし、1960年代になると東ドイツやソビエトがそれに続き、イギリス、フランス、チェコなどで体育術語の研究が進んだ。各国において体育に関する概念が違って使われたすと、1960年代に進んでいたオーストリ

アの研究者によって体育に関する語意の国際的な統一が呼びかけられ、1962年国際会議が開催されたのである。

### (2) 1960年代に東ドイツからスポーツ科学の誕生

1962年の国際会議では、ジーガー(Sieger, W.)が身体文化(Körper Kultur, Physical culture) > 身体教育(Körper erziehung, Physical education) > 身体修練(Körper Übung, Physical exercise)といった概念の整理を行った。それによって、世界中でこれらが、共通の概念の基盤とされるようになった。

さらに、ジーガーは1965年頃よりスポーツ科学(Sportwissenschaft)と言った言葉を盛んに使いだし、東独では体育学に対してスポーツ科学の言葉が一般的になっていく。

### (3) 各国のスポーツ振興とスポーツ科学

ドイツ民主共和国(東ドイツ)では、1968年9月国家評議会で「身体文化・スポーツの課題」を決議しており、その中でスポーツ科学を使っている。(Ⅳ、高水準のスポーツ科学とスポーツ幹部の活発な活動は、社会主義的な身体文化の推進力である。)

一方、ドイツ連邦共和国(西ドイツ)では、1966年にドイツスポーツ連盟常任理事会で「ドイツスポーツ憲章」を決定している。しかし、その中でスポーツ科学を使っていない。

フランスでは、1975年にスポーツ担当大臣から「体育・スポーツ振興法」が議会に提出され可決した。しかし、その中でスポーツ科学を使っていない。

アメリカでは、1974年に「コミュニティー・スクール法」を制定した。しかし、その中でスポーツ科学を使っていない。

カナダでは、1961年に「身体適正及びアマチュアスポーツの振興に関する法律」が制定された。しかし、その中でスポーツ科学を使っていない。

#### (4) 西ドイツにおけるスポーツ科学の出現

1970年になると、西ドイツでもスポーツ科学の言葉を使いだした。1970年に政府機関としてドイツスポーツ会議 (DSK) が誕生し、ドイツスポーツ連盟 (DSB) とスポーツ振興の両輪として動きだした。さらに、その機関に、スポーツ研究を専門とした国立スポーツ科学研究所が設置されたのである。また、1976年にドイツスポーツ科学連合 (Die Deutsche Vereinigung für Sportwissenschaft) が誕生し、スポーツ科学研究の中心となっていった。明らかに、東ドイツにおけるスポーツ科学の使用に影響を受け、1970年代には定着していったのである。

### IV. スポーツ学の誕生

ここで本学が唱えるスポーツ学といった新しい学説は、如何に考えて発展させることが望ましいのか、少し考えてみよう。

本学の生涯スポーツ学科 (学校、野外、地域コース) と競技スポーツ学科 (トレーニング・健康、スポーツ情報戦略、スポーツビジネス、コーチングコース) が、どのような方向を向いて研究を進めていくのかということであろう。

#### 1. スポーツ学の提唱

1960年代に一部の人達によってスポーツ学は提唱されたが、多くの賛同を得られなかった。また、彼らは以後その主張を継続的に行って来っていない。この主張は、後で述べる稲垣氏や寒川氏らのスポーツ学とは違ったものであり、ここでは取り上げない。

さて、2000年頃日本でもスポーツ科学の言葉が一般的に使われていたが、稲垣氏、藤井氏、寒川氏らは、新たにスポーツ学を提唱し始めた。根拠は、現代の体育の内容が発展的に拡大し、従来の体育学の範疇に収まりきれなくなってきた。そこから、新たな研究の体系的な枠組みとしてスポーツ学を提唱しているのである。特に、彼らの専門分野である歴

史学、人類学、文化論などの側面から、そのありようについて説明している。

#### 2. スポーツ学の研究対象

スポーツ学の研究する対象は、何であろう。本来、スポーツの本質は、体育と大きく違う。体育については戦前から研究が進み、戦後間もなく体育は「身体運動を通しての教育である」と一般に定義され、そちらの教育的な価値を核にした研究が広く行われてきた。

ところが、スポーツの場合は、戦後に1960年以降になってようやく各国で盛んになったことから、本格的な研究が始まったのもそれ以後であった。メキシコ・オリンピックが開催された1968年に、国際スポーツ科学会議が開催され、スポーツとは「プレイの精神を持ち、自己または他人との闘争、或いは自然の障害との対決を含むものである」と定義されたのである。同時に、スポーツは高い文化性をもつことから、文化の立場から研究が進められるようになった。

スポーツは、定義から「遊戯の要素を含んでいること」、「フェアプレーなどの規範によって統制されていること」、「競争・挑戦の要素を含んでいること」、「活発な身体運動であること」の4つの特性を持っている。であるから、スポーツは文化としての「遊戯価値」、「統合価値」、「克服価値」、「運動価値」を持つことに繋がる。つまり、スポーツ学の研究対象はスポーツといった文化であり、具体的に遊戯、統合、克服、運動の価値についてということになる。

### V. まとめ

私たちの大学はスポーツ学を追求することから、必然的にスポーツ文化における価値の追求が核となるであろう。つまり、生涯スポーツ学科 (学校、野外、地域コース) と競技スポーツ学科 (トレーニング・健康、スポーツ情報戦略、スポーツビジネス、コーチングコース) が、スポーツ文化の核である遊戯、

統合，克服，運動の価値について各方面から研究を進めていくことになる。

しかし，留意しなければならないことは，文化の形成は常に時代の影響を強く受けるものであり，それを無視することはできない。時代の影響とは，戦後であればGHQ支配，高

度経済成長，スポーツのプロ化，バブル経済，国際化などである。つまり，どんな時代であるかが，スポーツ文化の価値に大きな影響を持つからである。となれば，我々は時代の潮流に対して鋭い触覚をもち，スポーツ文化の形成に鋭意努力しなければならない。

